

オリンピック開催計画における「拡大化」と「非拡大化」の研究

A Study on "Enlargement" and "Non-Enlargement" of the Olympic Games Planning

佐藤 登 (Noboru Sato) 指導：原田 宗彦

オリンピックは競技種目、施設、マーケティング、放送等、スポーツ大会に関するあらゆる要素が世界最大規模で包含されるメガスポーツイベントの集大成であり、100 余年の歴史を経て、これまで様々な政治的社会的影響を受けながらもその規模を拡大させてきた。Chalkley & Essex (1999) は、オリンピックのためのインフラ整備と IOC 等組織の変遷及び都市への影響について、大会史を4期に分けてまとめている(表1)。

表1 オリンピックのためのインフラ整備とスポーツ関連組織の変遷及び都市への影響

段階	内容
1 1896 - 1904	小規模な大会、組織は未熟 オリンピックのための都市の新規開発なし
2 1908 - 1932	小規模な大会、組織は改良された 使用目的を決めたスポーツ施設建設が含まれる
3 1936 - 1956	大規模な大会、良好な組織体制 使用目的を決めたスポーツ施設の建設により 都市開発に影響を与える
4 1960 - 1996	大規模な大会、良好な組織体制 使用目的を決めたスポーツ施設の建設により 都市開発に多大な影響を与える

注: Chalkley and Essex (1999)を参考にして作成

かようにオリンピックは規模が拡大し、開催回数を重ねるに連れ、都市開発と密接に関係して開催都市のスポーツ施設等のインフラ整備にも深く寄与してきたのである。

しかし、IOC (国際オリンピック委員会) は、その拡大化傾向を必ずしも諸手を挙げて歓迎している訳ではない。IOC は規模の拡大が大会運営を高度で複雑にし、組織的な非効率に陥らせ、将来の成功を脅かすとして、2003年の総会で「規模、経費、複雑性の縮小のための『推奨事項』(OGSC レポート)」を採択した。

そこで本研究では、まず、IOC が求めているオリンピック像とは何か、その知見を得るために、同レポートについてテキストマイニング法によるコンテンツ分析(キーワード分析、共起性分析)を行ない、IOC の推奨の方向性を検証した。

具体的には、「規模、経費、複雑性」そして「レガシー(遺産)」の4語を重要語として出現頻度を測り、関連語との共起性を分析した。その結果、「コスト」の頻度数が極めて高く(コスト[77]>サイズ[21]>レガシー[17]>複雑性[12])、また、管理・縮小等を意味する語が他のどの重要語よりも強く共起した(図1)ことから、IOC は「コスト」に高い関心を寄せている可能性があることが確認された。

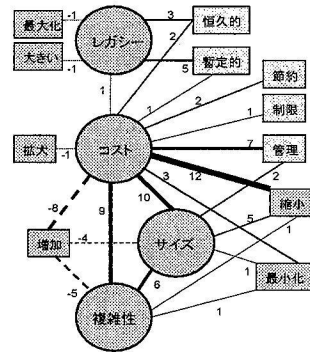


図1 「コスト、サイズ、複雑性、レガシー」の共起性
数値:出現頻度 出所:IOC「推奨事項」(2003)より作成

次に、拡大化の要因の一つであるオリンピック競技施設について、その配置に関する集中・分散の尺度の妥当性を検証した。方法には、大会開催時の競技者行動特性に則った試算モデル(図2)を用いて、過去のロンドン、パリ、東京、大阪の計画における各競技施設と選手村間の距離に関する数値比較を行ない、コンパクト性を測定した。

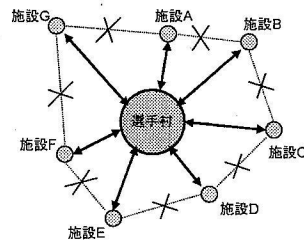


図2 試算モデル:オリンピック開催中の移動に関する競技者行動特性

比較には延べ距離、平均距離、標準偏差を用いた。その結果、現行のIOCの評価法では、例えば、ロンドンとパリ案での比較の場合、基準範囲によって施設集中度の判断が定まらないが、試算案においては、ロンドン案についてより高いコンパクト性があることを具体的に示した。そして、現在一般的な「選手村から半径10km以内」という尺度は、10kmという基準内に数値が包括的に取り込まれてしまい、施設配置の実態を的確に表していないとの結論に達した。

IOC が「コスト」に関心が高い可能性があることは、過去の巨額赤字大会の反省や開催都市の地域的偏重の是正に取り組んでいるという事実と合致する。またその出現頻度の高さはIOC委員のレポートの読後感に影響を与えている可能性もあろう。IOCは、招致都市に「コスト意識」を浸透させるためにも、曖昧さを可能な限り排除し、本研究の試算のような、より具体性のある指標を示す必要があるだろう。